

□ 平成21年度 第4回 図書館・文学館分科会 議事録要旨

日時	平成22年2月16日(火) 18:30~20:35
場所	荒川区役所4階 庁議室
出席者	柳田邦男分科会長、山崎一穎副分科会長 齊藤泰紀委員、並木一元委員、戸田光昭委員、横山幸次委員 北川嘉昭委員、友塚克美委員、藤田満幸委員  [事務局] 飯田昌宏 総務企画課特命担当課長 佐藤泰祥 社会教育課長兼文学館調査担当課長 北村美紀子 南千住図書館長 坂入康弘係長、吉野友博係長、水野裕都係長、村木一貴主査 須田具子、石原久美江

1 分科会長挨拶

2 分科会の進め方について(事務局説明)

3 議事

- (1) 荒川区立図書館の現状と課題
- (2) 新たな図書館の基本理念
- (3) 新たな図書館の役割・機能
- (4) 期待される事業内容
- (5) 新たな図書館整備の方向性

4 意見交換

(1) 「基本理念」について

○ 理念も大事だが、中身が大事である。

「一日居て楽しめる場所です」、「遊べる場所です」、「勉強ができます」、「調査もできます。」そういう感じなのだろうと思うが、表現はどうしたらいいのか。

一般区民の方も関係するとしたら、一言で分かりやすい言葉があったほうがいいかもしれない。

○ 自分の生活にとって、「読書環境がどう変わるのか」がイメージできる、そういうのが

とても大事だと思う。

だから、仮に理念を三つ挙げたとして、区民の心をキャッチするような表現があると思う。

そういう意味では、この案の理念は、提供する側の立場になっているが、図書館を作った結果、区民の読書生活がどう変わるのか、例えば1番目の「知恵袋」であれば、「私の知恵袋がやっどできる」とか。

2番目の「親切・ぬくもり・信頼」とかは抽象的なので分かりにくいので、具体性のある言葉で共通理念のある言葉を探して欲しい。

3番目であれば、「居場所」というのがとても大事な言葉だと思うが、「私の知的関心を満たす居場所ができる」など、主語が変わると随分と表現が変わる。そういう工夫をしてはどうか。

○ 私は自分が利用者であるなら、「寝転がって本が読めます」、そういう図書館でありたいという思いで聴いていた。それぐらいの「ゆとりの空間」とか「居場所」とか考えたときに、そんな思いがある。

○ 「親切」、「ぬくもり」などはどこの図書館でも掲げていると思うが、「基本理念」ならこれでいいのではないか。ここから派生するものに対して、インパクトのある新しい図書館の新しいイメージでやっていけばいいのでは。

そう考えると「知恵袋」という言葉は良い言葉だが、くだけている。このような言葉は、下の枝の方に持っていて、基本理念では「情報源」とかでいいのではないか。

○ 「教育ビジョン」は、具体的なものでなければ意味がないということで作っていただいたので、一つの参考になると思う。

○ 区民の皆さんに「図書館に行ってみようか」と思えるキャッチコピーを工夫してもらいたいと思うが、いい図書館は時間の流れが違う気がする。異なった空間に来たような感じで、表情も違う。

あと、前から言われている「問題解決」ということも、ここに来れば何か解決の糸口が見えるというようなワクワク感なんかも出るような所に。

○ 基本理念については、次のようにまとめさせていただきたい。

- 1 大きな知恵袋、
- 2 赤ちゃんもお年寄りも
- 3 新たな発見のある居場所

3の中には、「困ったこと、悩んだことが解決する場所」というニュアンスも入れてほしい。

## (2) 「新たな図書館の役割・機能」について

- キャッチコピーが出た後に、「〔3〕 新たな図書館の役割・機能」の記載は毛色が違う気がする。キャッチコピーから「〔4〕 期待される事業内容」までの中間の内容がどっかに出た方が分かりやすい。そういう意味で、「〔3〕 新たな図書館の役割・機能」を記載する場所がここではないのかなど。

また、「〔4〕 期待される事業内容」にいく前のところに、「キャッチコピーを実現するためにはこんなことが考えられんじゃないか」というイメージを具体化するものが入った方が、筋として分かりやすい気がする。
- 「理念」と「役割・機能」の整合性をみると、「理念」には「生涯学習」とか、「お年寄り」とかをしっかり語っているのに、「役割・機能」の方ではどういう位置付けになるのかが記載されていない。
- 12ページの「滞在型読書空間」の「滞在型」というのをもっと分かりやすく出してほしい。「滞在型」というのは、規模がちゃんとしていないといけなし、楽しくないといけなし、「家族で一日居られるんだよ」とか、「勉強してても一日居られますよ」とか、「ゆったりしてられますよ」とか、上手く活かしていただきたい。
- 「滞在型」というのは分かりにくい言葉だなと思いました。図書館の専門家の中ではキーワードになっているのですが。じっくり腰を落ち着けて時間を過ごせるような、そのニュアンスをもう少し具体的にしてほしい。
- 来る人によって目的が違っていて、その人たちにとって「使いやすい」、「過ごしやすい」空間等はまた違う。

調べ室と読書室は性格が違うわけだから、調べ室は棚が低くなくてもちゃんと本を見つけられて、それを読んだり、簡単に検索ができればいいが、読書をする環境はまた違う。

だから、一律に棚を低くすれば滞在型空間になるということではなくて、利用者のいろんなニーズにマッチングできるような空間とか資料とかが必要なんだろう。

ニーズ分けをしながら整備してく感じもあるかなど。
- ここ（13ページの図）にセンター館機能の部分が入ってきて難しくしている。

図（13ページの図の右側部分）の2（大規模で魅力的な蔵書構成）、3（子ども読書活動の推進と先進的サービスの提供）、4（ゆとりある読書環境の整備）を、（15ページ以降の内容と）当たってみると、2（大規模で魅力的な蔵書構成）は〔4〕の1（大

規模な蔵書構成で魅せる図書館)のところをカバーしていて、3(子ども読書活動の推進と先進的サービスの提供)がほしい〔4〕の2(子ども読書活動を推進する図書館)と〔4〕の3(先進的サービスを提供する図書館)に当たっていて、4(ゆとりある読書環境の整備)が〔5〕(新たな図書館整備の方向性)に当たっているように、いくつか階層が違うものがある。

ハンダルの文化資料とかニューメディアは書籍の種類なので、若干整理が必要。

センター館であるという内容は、分けて整理してあげれば見やすくなる。

レファレンスがあちこちに出てくるので、これを組み直せばすっきりする感じがする。

- 基本理念でいうと、1番目の「知恵袋」は体系的な蔵書みたいなどころがあると思うが、3番目の「出会い」は「なんとなく来てみたら面白い本があった」みたいなことだと思うが、そういう違いを際立たせていった方がおもしろいのではないか。

- (13ページの図の右側の)2、3、4というのは、〔2〕(新たな図書館の基本理念)から引き継がれてくるのはわかるが、(13ページの図の右側の)1(区立図書館全体のセンター館機能の大幅な拡充)についてはちょっと違う気がする。

「新たな発見の場」という考え方からすれば、これ以外にも何かある感じがして、そういうものを〔3〕のところに持ってこられれば、次の〔4〕のところで「具体的にこういうのをやりますよ」と上手く結び付けられる。

「センター館の機能」というのは、ここ(〔3〕)で出さなくてもいい。

- 少しそこは違う考えを持っていた。地域館と南千住図書館の図書館郡を、機能的、効率的、体系的に動かしていくには、今度の図書館はセンター館としての役割をもっとしっかり強化して、地域館との役割分担を見直していくべきではないかという問題意識を持っているので、「役割」というところには、「図書館の中での役割」に重きを置いた書き方を、前段(11ページ以前)の課題の整理でもそんな形でしてきた。

- 前段の図書館懇談会から引きずっている課題で、地域館をどうするかという議論がずっとあって、この館をどういう位置付けにするかという基本的な考え方の問題がある。

自分の家のすぐそばに歩いて通える気軽に行ける図書館も必要。しかし、同時に蔵書や資料的なバックアップ、レファレンスの機能を強化しなければならないという元々の発想があったわけで、どこに書くかは別にしても、地域館をきちっとバックアップしていくという機能を押さえて、全体をレベルアップさせていくという位置付けも必要だと思う。

- 中央図書館と地域図書館とが全体をコーディネートしてネットワークを作っていくと

いう仕事と、区民一人一人が図書館を利用する、そして新しくできる中央図書館の役割は何かという、2つある。

前段は行政上とても大事なことだが、それと中身を統合すると分からなくなる。

具体的にいうと、この(13ページの図の右側部分)1と、2・3・4とは異質であり、「センター館としての役割」(13ページの図の左側部分)は右側の1に該当してて、(右側の)2・3・4は理念で書かれたことに対応している。

- 荒川区の状況が分からない私から言わせてもらえば、まず序文のところで、センター館と地域館のことを押さえていただくと分かりやすい。
- 今度作るものはセンター館の機能を持つということと、公共図書館としてより充実した役割を持つという二つを書いてください。

### (3) 「事業内容」について

- 閉架図書の見覧について触れた方がいいのではないか。
- 子ども図書館のことが後ででてくるが、この資料の作り方からすると、全体の蔵書の中に子ども図書館の蔵書が含まれるように見えるが。  
子ども図書館を独立させるなら、18ページの「従来の児童コーナーではなく～」という表現ではなく、新しい概念の図書館を作り上げるんだという表現に作り変えないと。
- 吉村昭文学館ができるので、そこで展示を見て、吉村昭の小説を読みたいといったときに、少なくとも、この図書館には全部揃っていないと困る。  
同じ本を二つずつ揃えて、借りて読むのは図書館、収蔵保存するのは文学館。  
吉村昭関連の本は、分類にとらわれず一つにしておいて欲しい。
- 一般の区民からすると、分類法では内容がとんでしまって、目的のところに行き当たらない。  
ある図書館では、司書がフルタイムで働いているが、工夫して、展示の方法を学問上の分類にとらわれないでやっている。最後は人の問題になってしまうが。  
書架も、平積みでも、横積みでも全部できるようなものもある。
- 分類法に則ってというのは、管理の問題もあったと思うが、今回の提案ではICタグを入れたいと思っているので、そうなれば管理と見せ方は切り離しても問題なくなるので、区民にとってより分かりやすい見せ方の工夫ができると思う。

- 「ヤングアダルト」については、17ページの「(4) 地域資料の収集保存」の項目の次に入れていいと思う。  
健康情報については、先進的サービスとして19ページの「(3) 医療健康情報サービス、闘病記等の収集提供」にあるが、17ページの方に書いた方がいいと思う。
- 吉村昭文学館との連携を、18ページの(7)の前辺りに、具体的に書いていただけると。  
子ども図書館の部分は、まったく別に大きく項目立てした方が良く思う。
- 教育委員会の皆さんは、吉村昭文学館との連携は当たり前という想定で、このようになったのだろうと思っており、より以上にコーナーを作っていかれるのだろうと思っている。長崎県の諫早市の森山図書館では吉村昭氏のコーナーをちゃんと作っているし、浦和市(さいたま市)立図書館では吉村昭氏の本が96冊並んでいる。やはり大きい特色ですから、ちゃんと作っていただきたい。
- 17ページの(5)で「DVDは教養・学習目的のために」とあるが、娯楽のものはどうするのか。  
また、開架25万冊で、閉架書庫、子ども図書館がしっかりあって、と並べられているが、これらはぜひ確保してやってもらいたい。1万㎡の中で、どれだけ図書館が確保できるのかがとても大事なんだろう。  
プラスして、旅のコーナーを作ってもらいたい。
- 「教養・学習」で一番ぴったりくるのが「世界の大遺産」とか「自然・環境の保護」とかで、映像で環境・生体・動物・自然を学習できるものである。  
最近の娯楽作品は著作権の関係で、定価の5～6倍でないと買えない。黒沢作品や寅さんは5万円くらいで購入でき、最近の映画では、「送り人」が図書館の著作権処理済が、3,980円で購入できる。比較的いい日本映画の名作は買えるので、日本映画の名作は「教養・学習の範囲内」と考えたいと思う。
- DVDの「教養・学習」の範囲は明確にしておいた方がいい。いろんな要望が出てくるから、理論武装して、明確に伝えるようにした方がいい。
- 芸術関係の本は、高くて個人では買いにくいので、そういうものも想定に入れてほしい。
- 芸術関係の図書は厚くて大きいため、抱えては持っていけないので、その場で見られ

るよう、設計段階で工夫をして欲しい。

- 今の新しい図書館では、ここで見られるような引き出し付きの書架があるようなので、配慮したい。
- 伊万里図書館に行ったときに絵が吊るしてあって、それが貸し出されていたようなのですが、そういうことはどうなのでしょう。インパクトがあったのですが。
- どこまでニーズがあって、それにどこまでお金が掛けられるかというレベルだと思う。
- 障がい者サービスは、22ページではなく、先進的サービス（19ページ）の中の方がいいのではないかと思う。

#### (4) 「図書館整備の方向性」について

- 23ページの(6)に「400席程度の多種多様な閲覧席を整備する」とうたってあり感動しておりますが、このことで一番参考になるであろう函館市立図書館に今度視察に行くのですが、400席を確保するのはかなりのスペースが必要なるが、絶対に作ってほしい。どれぐらいのスペースが必要と想定しているのか。

21ページの(1)に「人が本を探している後ろを車椅子で通れるよう十分な書架間隔を確保する」とあるが、確保できれば望ましい。これをすべてのフロアにやっていると、それだけでも相当なスペースが必要になるので、臨機応変に対応してほしい。1万㎡の中で三つの機能を入れなければならない相当な難事業である。

書架の高さも低だけがいいわけでもないし、高いのがあっても何も問題ない所もあり、臨機応変にし、曲がりくねった所があってもいい。

23ページの(7)のブックカフェは、名称はともかくとして、絶対必要です。ただし、運営はしっかりした事業者にやらせて欲しい。

- ブックカフェは大賛成である。  
松山の「坂の上の雲記念館」の一番の悪評は、お茶を飲む所がないことである。
- 軽食でもレベルの高いものを食べさせてほしい。そこのランチとかブランチとかを楽しみにして行けるようなカフェにしてほしい。
- 3つの施設共通で考えたいと思う。

- 21ページの〔5〕の中で「来館型利用」と「非来館型利用」とを分けているが、これは図書館に行ったことがない人を引き付ける魅力が図書館にないことの裏返しだと思う。  
ここは「来館型利用」と「非来館型利用」を分けるのではなくて、むしろ身近な所で、お年寄りも若い人も、本に親しめる機会を広げていくと、そのためには、ふれあい館なども活用することが望ましいと思う。
- その直前の「予期せぬ資料との出会いの喜びは非来館型利用では得られない」（21ページ）を意欲的に強調するようしてはどうか。  
「非来館型利用は維持しながら～」という様な「まあそっちはそっちで」という言い方でない方がよい。
- 1万㎡で3つの施設が入るのかという話はあるが、基本は荒川図書館の建て替えが発点なので、これらの機能を優先的にきちっと配置するということが前提にあつての複合施設だという考えを、全体の認識にしておかなければならないと思う。
- 緑陰で本を読むということは日本ではあまりやらないが、ヨーロッパでは公園のあらゆるベンチが本を読んでいる人で埋まっている。ああいうのは気持ちいいと思う。荒川区からそういう習慣が起こってもいいかなと思う。